アラシのごとく！

猫耳執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アラシのごとく！

【Ｎコード】

Ｎ１２７６ＢＡ

【作者名】

猫耳執事

【あらすじ】

サンタさん（ＣＶ，若●）の部下のミスによって死んでしまった主人公のお話

これからハヤテのごとく！の世界で頑張って生きます！！

プロローグ（前書き）

駄文です。
この小説の今後は読者の皆様しだいです。
ヒロインはヒナちゃんがいいな？
作者の更新速度は感想＋お気に入り＋評価で決まります。

プロローグ

・・・・・・・みんな聞いてくれ、今俺の目前に変なおっさんがいるんだ。

上から下まで赤と白のめでたそうな衣装を纏って真っ白なお髭を蓄えたおっさんがいるんだ・・・・・・見るからにサンタの格好をしたおっさんがな！！！！

しかも

「お～まえは死んだのだよぉ～若者よ～～」

すごく聞き覚えがある声をしてるんだ！！ド●ゴン●ールのセ●や某魚だらけの国民的アニメのア●ゴさんの声なんだっ！！

「い～～かげんにこちら話を聞きたまえぇ～～」

「なんですか？わかもｔ・・・・・・ところであなたは誰ですか？」

「君に素ぅ晴らしいプレゼントを贈りにきたサ～ンタさんだよぉ～～（キランッ）」

「・・・・・とりあえず、クリスマスは過ぎてますよ？」

「そ～んなことはわ～かってるよぉ～。君は馬ぁ鹿なのかねぇ～～？」

「（イラッ）なら何しに来たんですか？もう新年なのでサンタなんか呼んじゃいませんよ？と言うかここ何処だよ？今すぐ家に帰せ馬鹿野郎！」

「いや～、ちょ～ッとしたミスでねぇ～、君の家に部下のソリが突っ込んでしまったのだよハ～ハッハッハッハ。そのソリが君に直撃してしまってねぇ、君は新年早々死んでしまったわ～けなのだよ～～。その部下は今頃北極圏のどこかでトナカイに引き～ずりまわされているだろう～～ぶるるあああああっ！！」

「はぁ？！何言ってんのおｍ「そ～んな訳で～、神や魔王とよく酒を飲んだりしてい～るぅ、こ～ころやさしいサ～ンタさんがぁ、き～みに新しい人生をプ～レゼントしちゃうぜぇ、ハイ拍手ぅ！！」

「てめぇ何わけのわかｒ「ハイ拍手ぅ！！」おｍ「ハイ拍手ぅ！！」だかｒ「ハイ拍手ぅ！！」・・・（パチパチパチ）・・・・死んだのは分かったけど新しい人生ってどういうことだ？！」

「か～みちゃんとま～おちゃんにた～のんでみたけどよぅ、『流石に生き帰せれねえわ～～（笑）』って話だから我慢してくれぃ。後戻りはできねぇ、生前の記憶は適当に消しておくから覚悟しとけぇ。お詫びといっちゃぁなんだが適当に特典盛り込んでおいてや～るから、じゃぁな若者よ～～、もういっぺん死んだときにま～た会おう！！」

シャンシャンシャンシャンシャン

「ちょ、お前らなんだよっ！！俺をソリに縛り付けんな！！はぁ？もう出発？グッドラック？てめぇらふざけてんのか？！安全は保障できないってどうゆうことだよ！！『カウントダウン５・４・３』お前ら覚えとけよ？！いつかぶん殴ｒ『２・１・０トナカイ型時空突破新世代ソリ試作機〈タイタニック〉発射します』その名前はありえねぇぇぇぇ・・・・・・・・・・・」

「こ～して少年は旅立ったのであったぁ。さらば少年よぉ、い～つかまた会おう。」

プロローグ（後書き）

感想待ってます＋あなたの一番好きなキャラクターに対する一言も待ってます

そういえば原作で自分の好きなアニメ（ゲームだったっけ？）のキャラが違う二人（駄目主人と書記）が言い争うってシーンあったっけ・・・・・・

第一話　紅いサンタクロース（前書き）

本当のサンタは黒色の衣装を着ていたそうです。

今の赤白サンタは、コカ●ーラのイメージキャラクターとして採用された際の物が世界に広まって標準化してしまったそうです。

第一話　紅いサンタクロース

〜十六年前〜

父「ハヤテだ、この子の名前はハヤテ。ハヤテと名づけよう」

母「まあいい名前。でも、どうしてなの？」

父「そんなの決まってるじゃないか母さん。借金取りから疾風(はやて)のように逃げられる強い子に育ってほしいからだよ」

（赤ちゃんハヤテ、あきれて泣き止む）

母「ならもう一人のこの子はどうするの？」

父「それももう決めてあるさ。ハヤテの双子の弟に当たるこの子の名前はアラシ、綾崎アラシさ」

母「ハヤテと同じでいい名前ね。で、どうしてなの？」

父「簡単だよ母さん。借金取りを嵐(あらし)のように叩きのめしてくれる

ような力強い子に育って欲しいからさ」

（心の中で「暴力で解決しようとすんなよ！」とツッコム赤ちゃんアラシ）

母「へえ、それはすてきな名前ねえ」

父「だろー、僕天才なんだ。これでいつ子ども達を置き去りにして逃げることになっても安心だよ」

母「さすが父さんね」

父＆母「ははははは♪」

こうしてハヤテ、アラシと名づけられた少年達は、生まれた日から完全無欠の能力を身に着けるべく、宿命づけられたのであったぁ。

（ＣＶ，若●）

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

その昔、夢に出てきたサンタに聞いた。

「ねえサンタさん・・・・・・どうして僕達にプレゼントを持ってきてくれないの？」

『それはね、お前達の家がビンボーだからだよ。』

「！！（ガーン）」

サンタは噂以上に正直な奴だった。

「ええ！？で・・・でもそれじゃ僕達はどうしたらいいのさ！？アラシにゲーム買ってあげるって言っちゃったのに！！」

『働け少年！！「働かざる物喰うべからず」欲しい物は自分でどうにかしろ。だが信じろ・・・・・最後に笑うのはきっと・・・・・

・ひたむきでマジメな奴だから・・・・・それでもお前達にはプレゼントはやらないけどｎ《てめぇーーー！！まちやがれぇーーー！！》・・・・厄介な奴が来よったのぅ』

《ハヤテ！！こんな奴のいうことなんて聞かなくていい！！こいつは今すぐ俺が殺る！！死ね！このクソサンタ！！積年の恨みここで晴らしてやる！！》

『ちょ、おま、去年よりもパワーアップしてね！？というか自分の兄の夢に乱入ってどんだけだよ？！』

《黙れ！！お前が実行犯だって事を知った後から俺は毎日鍛錬を欠かさなかったんだよ！！某公式チートさんも言ってたろうが！「気合で何とかなる」って！！》

「（ポカーーン）」

僕はこの後、自分の双子の弟がサンタを血まみれになるまでボッコボコにする様子をただただ見ていることしかできなかった。

《ふぅ、これでいろいろスッキリしたぜ！！》

弟のものすごくいい笑顔がとても印象的だった。

第二話　僕らとヤッサンのランデブー（前書き）

お気に入りはまだ三件だと・・・・・・

とりあえず三名の皆様ありがとうゴザイマス

総アクセス数が２００を満たないこの現実・・・・・ｏｒｚガクッ

第二話　僕らとヤッサンのランデブー

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

生まれたときから前世の知識を完全に覚えていた僕は、幼児ゆえの羞恥プレイを乗り切り、幼い頃から夢に出てきた仇（サンタ）をぶん殴り（とてもつらい修行をしたことは言うまでもない）、自分の親の破綻振りを思い知らされながら生きてきた。

今になってはサンタからもらった特典とやらにとても感謝している。

そんな僕が新しい生を受けてから早１６年・・・・

今、とても焦っていた

「迂闊だった！！都内から出れば流石にばれないだろうと思ってたのに！！」

県外の有名な万屋（よろずや）《決して万屋銀●んなんて名前じゃないからなっ！！》にアルバイトとして勤めていた僕は自分の考えの甘さを後悔していた

「これじゃ年が越せないよ！！まさか職場に押しかけて子供の給料

騙し取っていくなんて！！」

せっかく家から車で四時間はかかるような遠い職場を探したって言うのに、それを見つけ出して「急に祖母の入院がしてしまって・・・・アラシにはもう言ってありますからどうか今月分の給料前借させてくれませんか？」なんて言って数十万全額持っていくなんて・・・・

しかも年齢を偽って働いていたことまでばらして行ったせいで社員さんからは「流石に高校生をこのまま働かせるわけには行かないから・・・・ちゃんと卒業したらぜひこの会社に来てね！！」って言われて・・・・・・・気持ちは嬉しいですけど今お金がいるんですよ！！

『もし両親が借金してた場合、返済に充てるための貯金』を下ろすしかないか・・・・

「とりあえず、ハヤテと相談しないと。ハヤテ、帰ってきてる？（ガラッ）」

「アホーーーーーーーーー！！」

「いきなりどうした！！・・・・とりあえずその手に持っているものっすっごい桁の借用書から今の状況は理解したわ。とにかく逃げるぞ！！」

『ゴラァ綾崎ぃ！！息子達もらいに来たぞーーーー！！出て来いやゴラァ！！』

「ほら来たぞ！こっちだ！！早く！！」

「わ、わかった！！」

ｈａｙａｔｅＳＩＤＥ

「とりあえず差し押さえの手が回る前に銀行から現金下ろしてくるから公園で待ってて！！」

そう言ってアラシはどこかに行ってしまった・・・・・いつの間に貯金してたんだ？

それはさて置き・・・・あのタイプのヤクザは一億五千万なんて金額の借金を絶対見逃すわけがない！！

※綾崎家の双子は両方とも長年の経験からどのタイプのヤクザかを一目で見分けられるというできれば一生目覚めて欲しくない能力を持っていた！！

幾らアラシでも一億五千万なんて金額を貯金してるはずがないし、そんなはした金持って行っても臓器を売られてしまうのは確実！！

僕らみたいな人間が・・・・・てっとり早く一億五千万作るには・・・・それこそ強盗か身代金目的の誘拐くらい・・・・・

こうして少年は勝手に一人で思考を突っ走らせて悪の道へ進もうとしていったのであったぁ（ＣＶ，●本）

第三話　ロリコンに育てたつもりはありませんっ！！（前書き）

少し評価が増えて嬉しいです！！

第三話　ロリコンに育てたつもりはありませんっ！！

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

無事に通帳から全額下ろすことができた僕は、ハヤテとの待ち合わせ場所である負け犬公園（嘘じゃないよ！！）に急ぎました。

すると

「人の獲物に手を出すなぁ！！ネロの命日に（本日は１２／２４）ナンパなんて！！お前らどこのパトラッシュだ！！帰る家がある人はとっとと家に帰れ！！」

大声で意味のわからないことをほざいている兄がいました・・・・・・・

まぁ、小さい少女をかばっての行動だったみたいで、あっコートを貸してあげるなんて親切ですね？身内としては優しい子に育ってく

れて嬉しいかぎりです。

ですが

「僕と・・・・・付き合ってくれないか？」

「へ？」

ロリコンに育てた覚えはありませんっ！！

「僕は・・・・・（人質として）君が欲しいんだ。」

今までそんな様子はなかったのに・・・・・兄をこの手で始末しないといけなくなるなんて・・・・

「命がけさ・・・・一目見た瞬間から・・・・君を・・・君を（人質として）さらうと決めていた」

「はい、ちょ～～～～とこっちに来ようか？ハヤテ君？（ギリギリギリ）　そこのとっても可愛らしいお嬢さんはちょっと待っててね～？あ、あと君のお家の電話番号も教えてくれる？」

「かっ可愛い／／／・・・・わ・・・・わかった・・・・」

「じゃぁ、ちょっと待っててね～♪・・・・・オラァ！早く来い性犯罪者！！」

「ち、違うんだ！これはちょっと魔が・・・・って性犯罪者！？僕はただ身代金を・・・・」

「・・・・今ならまだ未遂で済むから・・・・・警察nっと、公衆電話発見！！とりあえず、保護者の方に連絡を・・・「きゃーー！雪で滑ってーー！！そこをどいてくださーーい！」はい？」

目の前には迫り来る自転車が・・・・ドコンッ！！

「「あ・・・お・・・・う・・・げふ。（バタ・・・・・）」」

こうして少年達の人生は、幕を閉じたのであったぁ（CV，●本でお送りしておりますぅ）

「あの・・・・ごめんなさい・・・・・だ、大丈夫ですか？」

「「てて・・・・・・・・・」」

・・・・・生存能力は黒いＧ並みの少年達なのであったぁ（ＣＶ，若●でお送りしていますってばぁ）

第四話　運命は英語で言うとデスティニー（前書き）

お気に入りが9件になりました！！

ありがとうゴザイマス！！

第四話　運命は英語で言うとデスティニー

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「「あ・・・お・・・・・う・・・げふ。（バタ・・・・・）」」

「あの・・・・ごめんなさい・・・・・・だ、大丈夫ですか？」

「「てて・・・・・・・・・・」」

ハヤテを抱えて避けることくらいはできたけど・・・・・・・・あのタイミングで来られると避けるわけにはいかないじゃないですか、避けたらこの女性が怪我をしてしまうかもしれませんでしたし

「あの・・・・お医者さん呼びましょうか？」

「・・・・・・」

綺麗な人ですね～～今まで見た女性の中でも１，２を争うような・・

・・・って完全にハヤテは見とれちゃってますね？

「あの・・・・体は？」

「体がどうかしましたか？（スクッ）」

「（・・・・・・）えっと・・・・・」

「ご心配なく。頑丈だけが取り得ですから。」

「（・・・・・・・・・・）では、そちらの方は・・・・」

「ああ、ぜんぜん大丈夫ですよ？コレでも兄よりは丈夫ですから。」

「あら、ご兄弟だったんですか？それは気づきませんでした。」

「（お・・・・驚いたよパトラッシュ・・・・世の中にはこんなキレーな人がいるんだよ・・・・・お前は犬だからわかんないだろーけど。）」

「（ハヤテは今絶対変なこと考えてんだろーな・・・）一応双子な

んですよ？二卵性なので似てませんけど・・・・」

「そうなんですか・・・・えっと・・そのお兄さんは本当に大丈夫ですか？ボーとしてらっしゃいますけど？」

「へっ!?はい、もちろん!!頭はいつもゆるんでますから!!」

「あの・・・ご無事でしたらちょっとお聞きしたいことがあるのですが・・・・よろしいですか？」

「え？なんでしょうか・・・・？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

『あなた、恋人とかいますか？』

『!!』

『自転車であなたを轢いた瞬間思ったんです・・・・これは運命。英語で言うとデスティニー。ですから私、あなたのことが・・・・』

『ドキドキドキドキ』

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「（なんて嬉しい展開に・・・・・・せっかくのクリスマスだし・・・やっぱ・・・・）」

「ジトーーー（ハヤテの奴・・・・絶対へんなこと考えてんだろうな・・・・ハァ・・・・）」

「（うーーん・・・・・・本当に大丈夫かしら・・・・・・）」

「・・・で、その子の特徴は？性別とか、来ている服の色とか、年齢とか・・・・」

「女の子を探しているんです。１３歳になるちっちゃい女の子なんですけど・・・」

「もしかして・・・・パーティードレスとか着てませんでした？髪型はツインテールで・・・・」

「そうなんです！！あのこ世間知らずだから・・・・誘拐犯にだまされてヒョイヒョイついて行かないか心配で・・・・って心当たりがあるのですか？」

「はい、ちょうど今ご自宅に電話w「そいっ！！！」ゴフゥ！！ハ、ハヤテ・・・・貴様・・・ガクッ」

「（借金を返すためにもここで失敗するわけにはいかないんだ！！）悪いですけど・・・・知りませんよ・・・・（誘拐する）予定がありますから僕たちはこのへんで・・・・」

「そ、そうですか（弟さんがいきなり倒れかけたけど・・・大丈夫かしら？）・・・もう少し探してみます・・・・あ！！あの・・・ちょっと待って。」

「はい？（フワッ）・・・え？」

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・・風邪を引いちゃいますよ・・・・・？」

「・・・・・（じわっ）えぐっ・・・・・」

「え？」

「うあああああ・・・・・・・・・（ポロポロポロ）」

「ええ?･え?･え!?･あの・・・・・・私何か悪いことでも・・・・・!?･」

「ごふっごふっ!!・・・・ハヤテ!お前いきなり殴りやがっt・・・何この状況??」

「あの!!その女の子ですけど・・・実は!!」

『誰かーーーーーーーー!!!』

第五話　時速８０キロ（前書き）

日刊ランキング乗れば・・・・・

お気に入りも増えるはず！！

と言うことで頑張ります！！！

あと、一話あたりの長さを長くしたほうがいいのかな？

第五話　時速８０キロ

「こんな寒い夜にそんな薄着でいると・・・・風邪を引いちゃいますよ・・・・・・？」

「・・・・・（じわっ）えぐっ・・・・・・」

「え？」

「うあああああ・・・・・・・・・（ポロポロポロ）」

「ええ？え？え！？あの・・・・・・私何か悪いことでも・・・・・！？」

「ごふっごふっ！！・・・・ハヤテ！お前いきなり殴りやがっｔ・・・何この状況？？」

「あの！！その女の子ですけど・・・実は！！」

『誰かーーーーーーーー！！！』

『ぐっ！！何をする！！離せ！！』

『うるせぇ！！ちっ！！大人しくしろ！！』

『くっ！！離せ！！離せ～～～～！！』

バタン

ブロロロロ・・・・・・

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「目の前で誘拐されてったよあの子・・・・・・」

「大変！！あの子ったら！！本当に誘拐されてる！！どうしましょうどうしましょう！？と・・とりあえず警察を・・・・！！」

「・・・・自転車・・・・ちょっとお借りしますよ。あと警察に連絡を・・・・・」

「え？ちょ・・・・君！？」

「ご心配なく。僕が必ず追いついて、あの子を助けてみせます。」

「で・・・・でも、相手は車よ！！！そんな自転車なんかじゃ・・・・絶対に追いつけるわけが――――――――――（ゴッ）ない。・・・・・・え？」

「ハヤテの奴いつもの二倍くらい飛ばしてるな～～？じゃぁ、警察はお願いします！！」

「へ？君は？（ギュオッ！！）・・・・人間辞めてませんか？」

この二次創作の主人公は決して人間辞めてるわけではありません～、

一度死んじゃってますけどぉ（ＣＶ，ｗａｋａ●ｏｔｏですってばぁ）

第五話　時速８０キロ（後書き）

日刊ランキングに乗ってもお気に入りが増えなかったら・・・・・

ガクブルガクブル・・・

第六話　そのニット帽はハゲを隠すため・・・

「まったくこうもあっさり誘拐できるとはな！！」

「一人になってくれて助かったぜ！！」

「・・・・・・（怒）」

「ところでアニキ、先程から人質が恐ろしい殺意を持った目で睨んできているのだが・・・・」

「気にするな！！」

「おい、そこの馬鹿二人・・・・お前達に少し頼みたいことがあるのだが・・・・」

「ふはははは！！何だ小娘！？一得が泣き叫んだって無駄だぜ！！」

「こっちは借金で生きるか死ぬかの瀬戸際なんだ！！ちょっと大人しくしていてもらおうか！！」

「空気が汚れるから、呼吸をやめてくれないか？環境破壊だぞ。大切にしろよ、地球は。」

「「・・・・・・・・・・」」

「こ・・・・このガキ！！」

「まあ、待て！！人質殺したら元も子もねえ！！まだそいつの身元わかってねーんだから。それとてめぇも・・・・あんまりナメた口は利くなよ！！こちとら博打で作った借金のせいで、危ねーチワワに臓器狙われてる身だ・・・・だからオレ達を怒らせると・・・・・少々痛い目見る事になるぜ。」

「だから・・・・・・呼吸するなと言ったろ？ハゲ！！」

「！！！」

「こ・・・・この・・・・・」

「つーかお前も、その馬鹿丸出しのグラサンはどこのファッションリーダー気取りだ？それともあれか？宗教か？馬鹿の神様を光臨させる儀式の途中なのか？」

「てめぇ、アニキのハゲは馬鹿にしても、グラサンだけは許せねぇーーーーーー！！」

「ばっ！！誰もハゲてねぇーよ！！」

「こうなりゃ大人を馬鹿にするとどうなるか、身体に教えてやるぜ！！」

「え！？弟よ！！いつからそんな子供好きに・・・・・」

ドカァ！ミシィ！！

「ち・・・近寄るな変態・・・それ以上近づいたら・・・・人を呼ぶぞ馬鹿者！！」

「はっ！！馬鹿はお前だ！！小娘！！時速８０キロ以上でぶっとばす車に、呼べば来る奴がいるとでも思うのか！？」

「いるさ！！命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ！！」

――――――――――――――ハヤテ！！

ゴウッ！！！

「！！なにぃ！！」

ズガガガガガ！！

ギッ！！

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――――

「おい！！ハヤテ危な――――――

ドガァ！！！！！！

第七話　やり残したこと

「いるさ！！命がけで私をさらうと誓った。だから呼べば来るさ！！」

「だったら今すぐ呼んでみやがれ！！」

――――――――――――――――ハヤテ！！

ゴウッ！！！

「！！なにぃ！！」

ズガガガガガ！！

ギッ！！

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――――

「おい！！ハヤテ危な――――――

ドガァ！！！！！！

「あっ！！アニキ！！」

「っせえ！！いきなり目の前に出てくる奴が悪いんだよ！！」

「おい・・・・お前達！！よくも・・・・・・よくも二人を！！」

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「おい、この悪党ども！！おとなしくその子をかえ――――――

「おい！！ハヤテ危な――――

ドガァ！！！！！！

ハヤテに少し遅れて誘拐犯の車に追いついたのはいいけど・・・・・

見事に轢かれたなぁ・・・ハヤテが勝手に飛び込むから・・・

地面に落ちるまえにキャッチするのはいいけど・・・血でベッタリになるな・・・仕方ないか・・・ってんん??

クルクルクル・・・・ゴッ!!バンッ!!

「あ〜〜〜〜悪いんだけど・・・その子を僕に・・・返してくれる?」

「「は・・・はい・・・・」」

・・・心配なかったか・・・血の残量以外は・・・

ウ〜〜〜ファンファンファンファン

警察も来たし、誘拐犯は任せてハヤテの手当てを・・・・・

「おい、馬鹿アニキ。さっさと傷見せろ。止血すっから」

「ああ、ごめんねアラシ・・・・」

「おい！！お前その傷――――――」

「あ・・・・よかった無事だった？」

「ん・・・・うん・・・・私はね・・・・」

「君が無事で・・・本当に良かった・・・・・」

「またお礼しなきゃな。／／／」

「だったら・・・今度は僕らの・・・新しい仕事でも・・・・・見つけて――――――「おっとっ（ドスッ）グフゥ！！ハヤテ・・・・お前・・・オレに恨みでも・・・・ガクッ」

「え！？お・・・・おい！！」

「ナギ！！」

「おお！！マリア！！そいつらの応急手当を頼む！！私のケータイを！！」

「へ？え、え～と・・・」

薄れていく意識の中でさっきのお姉さんの声を聞いた気がした・・・

・

第七話　やり残したこと（後書き）

「（ピッ）クラウス、私だ。位置はわかるな？大至急医療班を手配してくれ。１分以内だ。」

「あの・・・とりあえず見た目ほどひどいケガではなさそうですよ。弟さんの方は傷一つありませんし・・・・」

「な、なにぃ！！」

この作品の主人公は某公式チートさんと同等の頑丈さで御座いますぅ（ＣＶ，ＮＷ）

第八話　お風呂にはロマンが詰まっている

「この男たちを・・・・・私の新しい執事にする。」

「・・・・・・・・・えっと、話の流れがよく理解できないのですが・・・・」

「ま・・・・命の恩人の頼みというのもあるが・・・・・なんと言うか、その・・・・・そっちの男に告白されたんだ。さっき公園で・・・・とても情熱的に・・・・・『君をさらいたい』とかなんとか・・・・こっちの男も・・・・私のことを・・・・とっ・・・とっても可愛らしい・・・・お嬢さんって・・・・（カアアア／／／／）」

「はぁ！？」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ご兄弟の兄の方はまあ確かに、頭を相当激しく打ったようですが・・・・命に別状はありませんよ、命には・・・おそらく日ごろからかなりしっかり鍛えていたのでしょう。驚異的な頑丈さですよ・・・・・頭は元から悪そうですし、顔も貧相ですが・・・・・弟さんの方は・・・・・本当に時速８０キロの車に轢かれたのか？ってくらいなんともありません。お兄さんよりもさらに鍛えていたのでしょうね。・・・・・彼はもう私達と同じ人間なのか怪しいくらいですよ。気を失った原因はただの睡眠不足でしょう。最近しっかり寝ていなかったんじゃないですかね？まあ、何かあれば呼んでください。」

「はい先生、ありがとうございました。」

「で？どういういきさつがあったんですか？」

「何が？」

「何がって・・・・あのご兄弟とのいきさつですよ。お兄さんは自転車で車に追いついたり、その車に轢かれても命に別状はなかった

り・・・弟さんは走って車に追いついてお兄さん同様轢かれて無傷だったり・・・・もはや人にカテゴリィされるのかわからないと思うんですけど。」

「そりゃあ私の執事になる兄弟だ。きっと体は新造細胞とかでできているに違いない！！」

「いいんですか、人間じゃなくて？」

～～～～ナギがマリアに事情説明中～～～～

「ま・・概ねナギの方の事情は理解しました。あの方達が起きたら知らせますから自室にいて下さい。」

「うむ、わかった。とにかくあいつらを私の執事にするから。」

バタンッ

「（さてさて・・・・・どうしたものでしょうか・・・・・）」

ａｒａｓｉＳＩＤＥ

「う、う～～ん・・・・ここはどこだ？」

目の前にはものッすごく豪華な調度品の数々が・・・・

「ここは・・・・もしかして天国・・・・な訳ないな。もう一度死んだら確実にあのクソサンタの元に行くはずだし、もとより怪我なんかしてないしな。・・・・・と言うことはあのパーティードレスのお嬢さんの家と言うのが最有力か・・・・とりあえずハヤテが何か起こす前に見つけ出さないと、お風呂で何か起こしそうな気がするし・・・・・・・」

この小説の主人公はよ～～～～く！！兄のことを理解しておりますぅ（ＣＶ，Ｗ）

ガチャ

「とりあえず誰か人を見つけてハヤテの事を聞かないと。・・・・・・・こっちのほうから人の気配がする。」

廊下に出て人の気配がするほうへ向かって行く。

それにしても・・・・この家・・・・いや、屋敷はとても広い割りに人の気配が少ないな？

一番近い人の元に着くまでに一分は掛かりそうだ。

「（あっ人がいる！）あの～～？」

「ムゥ？誰かな？この三千院の屋敷を無断でウロつく変質者は・・・・」

「へ？」

このおじさんいきなり何を言ってるんだ？

「成敗してくれる！！喰らうが良い！！クラウスキーーーーック！！」

「はいぃ！？『気合防御』！！」

ガキィン！！

「その身のこなし・・・只者ではないな？・・・お前は誰だ？」

～～～～～状況説明中～～～～～～

「先程お嬢様が運ばれてきた方でしたか。こ、これは失礼しました。このたびはお嬢様を助けていただいてありがとうございます。あと、お兄様のお部屋は申し訳ありませんが私は存じ上げておりません」

「そうですか・・・・・わかりました、とりあえず部屋に戻っておきます。これ以上動き回ってすれ違いになってしまったら大変ですし」

「申し訳ありません。早急に対処しますので・・」

「いえいえ良いんです。兄は少しに抜けているところがあるので心配だっただけですから。」

「いえ、お嬢様からは客人として迎えるように申し付かっておりま

す。確認してきますのでこの部屋でお待ちになっていて下さい、すぐに使いのものを出しますので。」

「そうですか・・・ならお願いします。」

ガチャ

バタン

「綾崎アラシ・・・・あの身のこなし・・・・・姫神の公認に最適かも知れんな？考えておこう。」

こうしてアラシはこの屋敷の執事長クラウスに認められたのであった。

～～～～その頃ハヤテは～～～～

「・・・・・それにしても、本当に頑丈なんですね・・・・体・・・」

「へ？」

「だって・・・・あんなに激しく車にひかれたのに・・・命に別状はないといえ、深い傷を負っているのにお風呂に入るなんて・・・・」

「・・・・・・・・」

「普通だったら、傷口が開いちゃいますよ～～」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「ゴファッ！！！」

「キャアアアア！！！」

大浴場で今度こそ本当に死に掛けていたらしい

第八話　お風呂にはロマンが詰まっている（後書き）

なぜ、ナギが誘拐されたときにハヤテしか呼ばなかったのかと言いますと、ただ単に名前を知らなかっただけなんです。

請求書の裏にはハヤテの名前しかなかったのです。

アラシはもともと

「クリスマスプレゼントなんて要らない！！（サンタが嫌いなため）」

と言っていたのでこうなりました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1276ba/

アラシのごとく！

2012年1月5日22時50分発行